

玉織姫(たまおりひめ)

登録番号：第2177号

育成者：村岡邦三 渡辺 進

登録年月日：平成2年4月3日

三好恒和

登録者：群馬県(前橋市大手町1-1-1)

来歴：「織姫」の自然交雑実生

特性

■栽培特性

若木のうちは直立性を示すが樹齢が進むと次第に開張し、成木の樹姿は中間形となる。樹勢は中ないしやや強で、樹の大きさは中程度である。枝梢は太さ中で節間長は1.5cmと短く、緑色の地に紅色を帯びる。幼葉は淡紅緑色。成葉は濃緑色で広卵形。大きさは「織姫」や「甲州最小」より大きい。蜜線はなく、托葉は刀状で大きさ中である。

花の大きさは小。一重咲きで花弁数5枚を基本とするが時には6枚のものもある。花弁の形は丸く大きさは小、色は白色で底部に若干桃白色を帯びる。雌ずいは1本で不完全花の発生は少ない。花粉の量は多く、平均68.7%の発芽率を有する。

花芽の着生は連年多く、「織姫」に比べて年による変動が少ない。開花期は育成地で3月上中旬となり「織姫」や「甲州最小」より早い。自家結実率は65%と高く、隔年結果性もあまりみられず毎年よく結実する。ただし、後期の生理的落果がやや多いため、花芽当たりの収穫果数は「織姫」や「甲州最小」に比べるとやや少ない。

本品種は小梅に分類され開花期が早い。育成地における開花期は「甲州最小」とほぼ同時期の3月上中旬となる。自家結実性は高いが安定した結実を確保するためには開花期の同じ小梅系品種の混植が望ましい。開花期の遅い「白加賀」やその他大梅系品種は開花期が合致しないため受粉樹としては不向きである。

■果実特性

果実は短楕円形で、成熟すると丸みを帯びた豊円となる。果頂部は平で先端がやや凹む。梗あいの深さは中、広さは広く「織姫」に似るが縫合線の深さは浅い。果実の大きさは10~15gの小~中粒で、現在の栽培品種の中では特徴ある大きさである。果形、玉揃いはともに良好。果皮の色は淡緑色で「甲州最小」より淡く「織姫」より濃い。陽光面はわずかに着色する。果肉の色は「甲州最小」と「織姫」の中間の淡緑色である。果肉の厚さはやや薄い。

核の大きさは1.5g程度で他の小梅に比べるとやや大きい。形は丸みを帯びた短楕円形で、先端部の尖りはほとんどなく、含核加工製品(梅干し等)を口に含んでも安心である。

果実は早採りすると果肉歩合が低いので、花の満開後110~120日(育成地で6月上中旬)を経過して果実が十分肥大してから収穫することが大事である。用途は、やや早めの収穫によるカリカリ漬けや完熟直前に収穫した果実を用いる梅干しが最適である。

■病虫害抵抗性

黒星病に対しては「織姫」や「甲州最小」程度の発生で比較的強く、生育期の2~3回の防除で十分に防ぐことができる。かいよう病の発生は特に認められていない。アブラムシ類も通常の防除を実施していれば特に問題はない。コスカシバの被害は中程度である。

■地域適応性

土壌適応性は、他のウメ品種と同様、比較的広いものと思われる。群馬県においては、従来の主要品種である「白加賀」に加え、地域特産の梅干し用品種としての普及を図ることとしており、榛名町、箕郷町を中心に新植が進められている。

(村岡邦三)